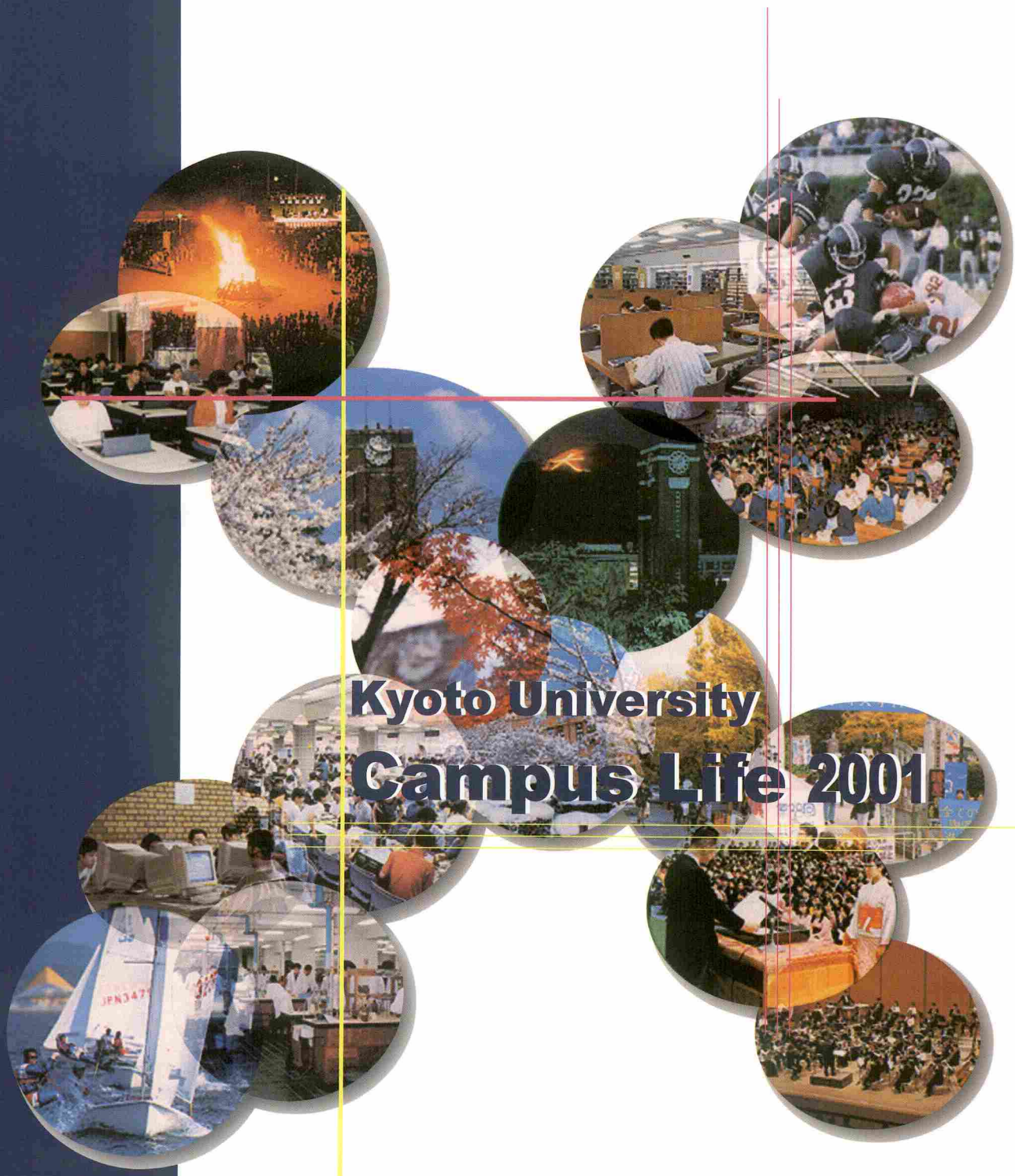
京都大学学生生活白書

平成13年度《学生生活実態調査》のまとめ－概要－



京都大学学生部

目次

A. 調査に協力してくれた人たち…… 1
B. 家庭状況…… 1
C. 住居と通学…… 3
D. 生活費の状況…… 4
E. 奨学金・授業料免除…… 5
F. アルバイト…… 5
G. 食事…… 6
H. 耐久消費財…… 6
I. 学内施設の利用…… 7
J. 入学と学業…… 8
K. サークル・ボランティア活動…… 9
L. 旅行…… 11
M. 健康・悩み…… 11
N. 進路（進学・就職）…… 12

表紙カット＝京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史－写真集』：京都大学後援会（1997）より

A. 調査に協力してくれた人たち

京都大学の学部と大学院に在籍する学生を対象に学生生活の実態を把握し、キャンパス全般の環境整備に役立てるため、昭和28年以降『学生生活実態調査』を実施しています。前回(29回)からは、調査結果を冊子にまとめるだけでなく、パンフレット形式の概要版も作成することになりました。すべての京大生の中から１５人に１人の割合で1,802人を無作為に抽出し、平成13年11月にアンケート調査を実施したところ、前回とほぼ同数の約62％に当たる1,109人から回答が寄せられました。調査に協力してくれた学生諸君に感謝します。

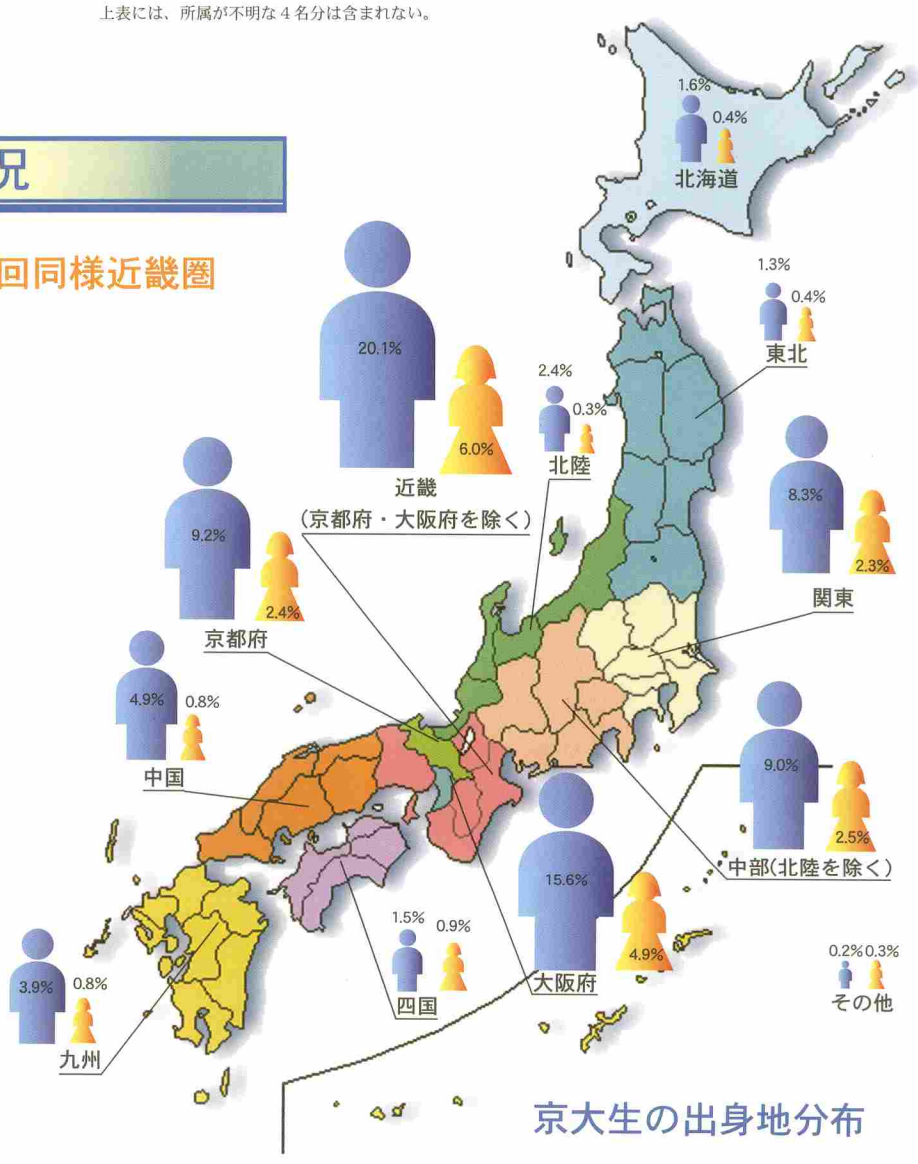
学部・大学院	学　部	修士課程	博士課程	合　計
総合人間学部	27	−	−	27
文学部・文学研究科	23	20	22	65
教育学部・教育学研究科	11	7	7	25
法学部・法学研究科	59	10	2	71
経済学部・経済学研究科	26	10	13	49
理学部・理学研究科	40	55	51	146
医学部・医学研究科	9	6	52	67
薬学部・薬学研究科	13	19	8	40
工学部・工学研究科	168	130	35	333
農学部・農学研究科	50	70	32	152
人間・環境学研究科	−	16	20	36
エネルギー科学研究科	−	21	7	28
ｱｼﾞｱ･ｱﾌﾘｶ地域研究研究科	−	−	2	2
情報学研究科	−	35	6	41
生命科学研究科	−	20	3	23
合　　計	426 (51%)	419 (73%)	260 (66%)	1,105 (62%)

(　) 内の数字は回収率を表す
上表には、所属が不明な４名分は含まれない。

B. 家庭状況

京大生の出身地は、前回同様近畿圏を中心に分布

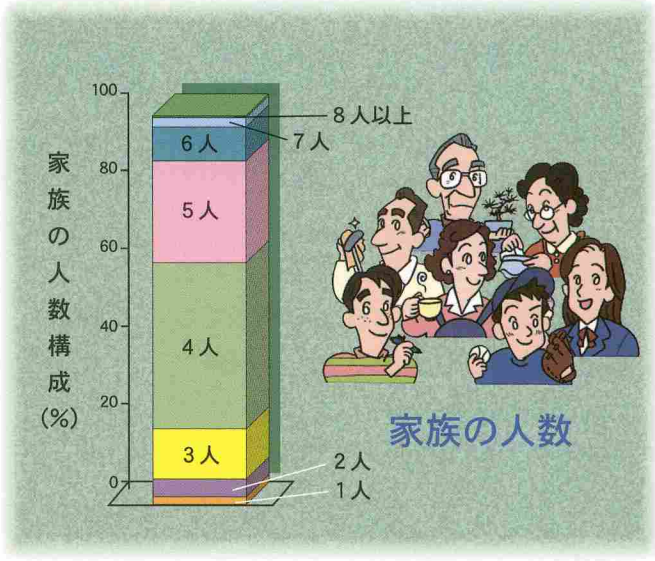
京大生を性別に見ると、男性78％、女性22％であり、前回調査に比べ女性の比率が若干上昇した。年齢別分布は学部生で21～22歳(55％)、修士で23～24歳(61％)、博士で25～26歳(41％)がピークとなっている。また博士課程学生では30歳以上が同課程学生の28％を占めている。出身地は大阪府が全体の21％でトップであり、次いで京都府の12％となっている。京都・大阪に兵庫・滋賀・奈良・和歌山・三重を加えた近畿圏で全体の58％を占めており、学生の出身地の分布は前回の調査と同様の傾向を示している。

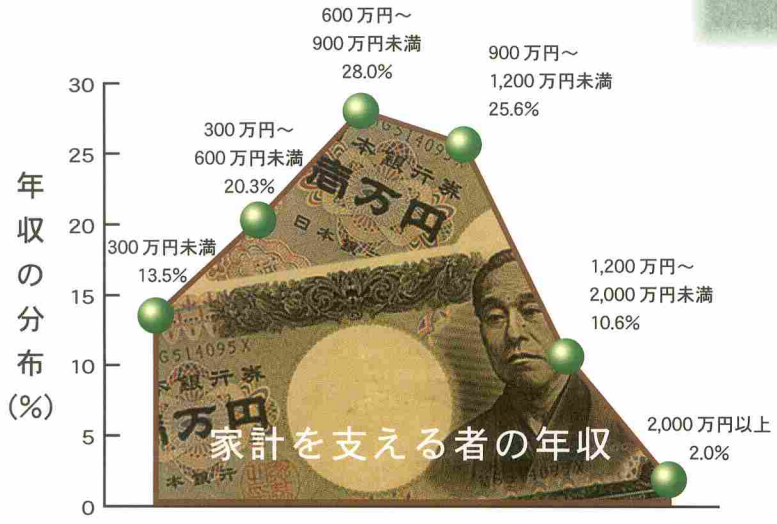


京大生の出身地分布

家族構成、年収は前回調査と変化なし

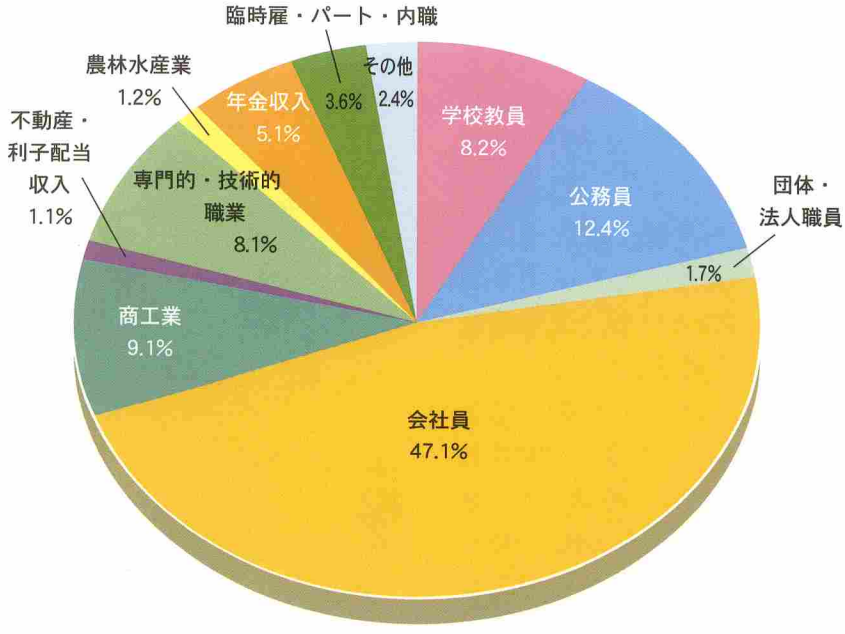
不況が深刻化する前の調査のためか、≪家計支持者≫、≪年収≫、≪家計を支えるものの職業≫については、前回調査と大きな変動は認められなかった。本人を含めた家族の人数構成は≪４人≫43％、≪５人≫26％、≪３人≫13％であり、全体の82％を占めていた。主に家計を支えているのは、全体では≪父≫と≪母≫で91％であるが、博士課程学生の場合は≪本人≫と≪配偶者≫をあわせると27％に達していた。また、主な家計支持者の年収は全体では≪600万円以上900万円未満≫が28％、≪300万円以上600円未満≫20％、≪900万円以上1,200万円未満≫26％であったが、博士課程学生に限定すると、≪600万円未満≫45.7％、≪900万円以上1,200万円未満≫22.4％の２つのピークが見られた。





既婚者は５％、そのほぼ半数が子供持ち

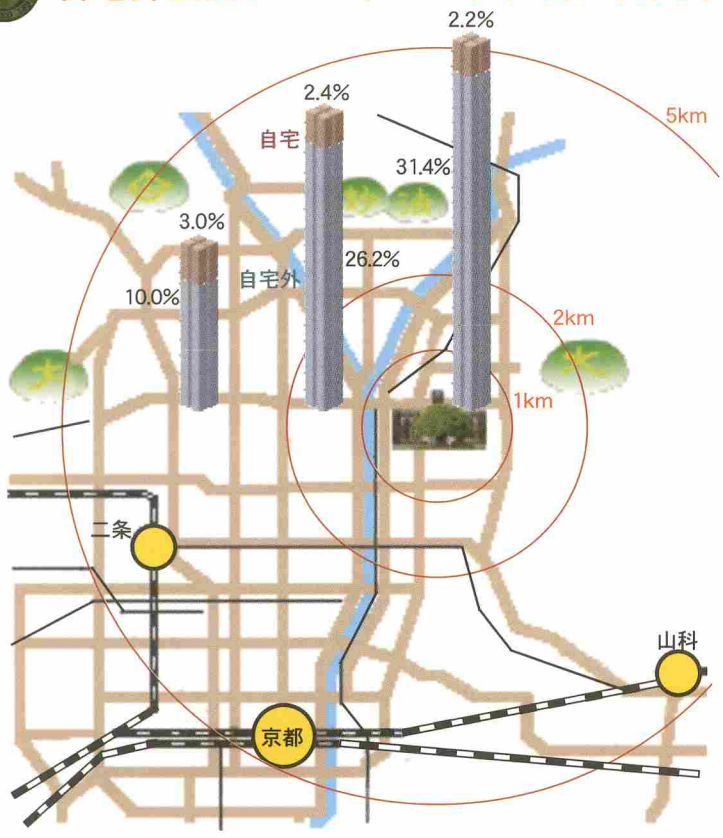
学部学生では既婚者は実数で１名(0.2％)のみであったが、修士課程学生では２％、博士課程学生では16％が既婚者であった。既婚者の子供の数は≪いない≫が55％、≪１人≫が28％であり、既婚者の２人に１人は子供を持っていた。既婚者の子供の数は、修士課程学生と博士課程学生では同様の傾向を示していた。



家計を支える者の職業

C. 住居と通学

自宅外生はアパート・マンションに大半が居住

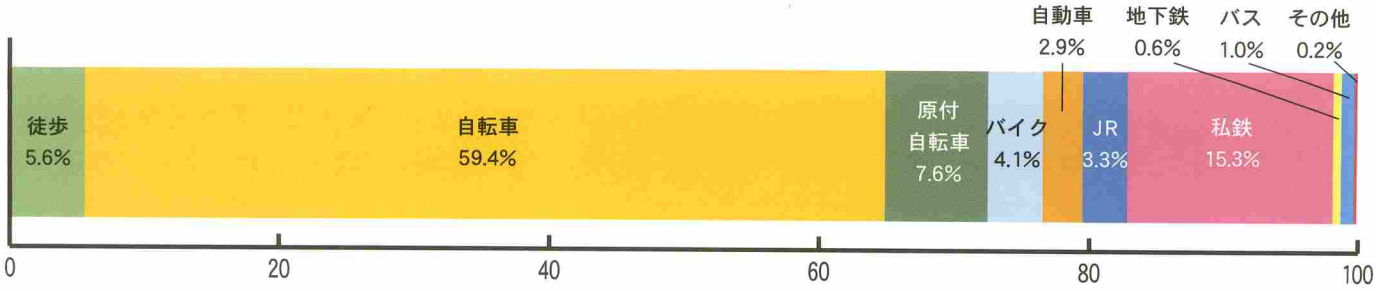


吉田キャンパスを中心とする通学圏

居住地域は吉田キャンパスを中心に２km以内が京大生全体の62％を占めており，≪京都府下≫が４％、≪大阪府、滋賀県、奈良県≫が15％と前回調査に比べ若干増加している。京大生の72％は親元を離れて下宿生活を行っており、下宿生の住居は≪アパート≫あるいは≪マンション≫が全体の91％を占め、前回調査に比べ増加傾向にある。その分、伝統的な住居タイプである≪貸間≫の割合が低下しており、≪１人部屋≫に住んでいるものが94％に達している。また、京都大学あるいは学外団体の学生寮に住居している学生は３％に過ぎない。平成15年度からは工学研究科が桂キャンパスへ移転することになっており、今後学生の居住地域などに変化が生じる可能性がある。

京大生の主な通学手段は自転車が主流

前回調査と同様、住居から大学までの主な交通手段に占める≪自転車≫の割合は依然高く(60％)、公共交通機関の利用者が20％となっている。また、通学所要時間は≪30分未満≫の者が77％と最も多い。京都大学の場合、市の中心地にありながら多くの学生が大学に隣接した地域に居住し、吉田キャンパスを中心としたひとつの学生街を形成している様子が窺える。

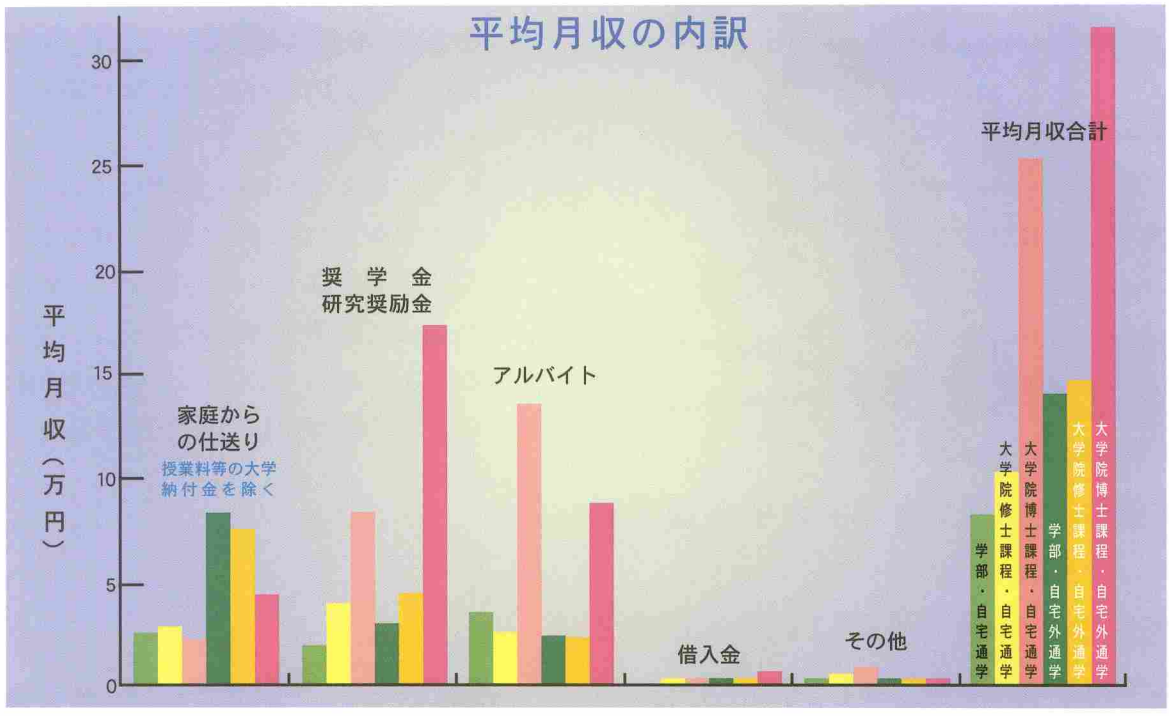


通学のための交通手段（%）

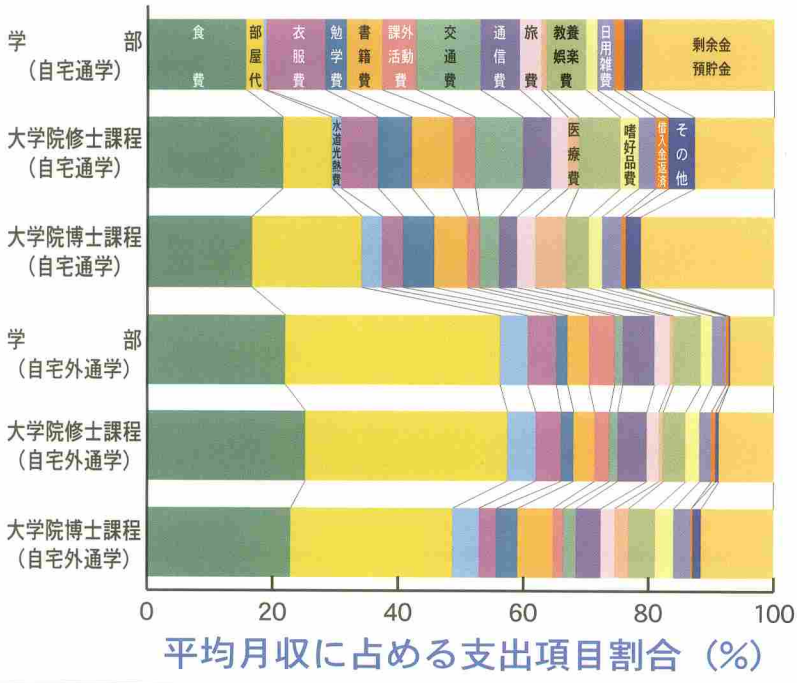
D. 生活費の状況

家庭からの仕送りが低下し、総収入が減少

京大生の平均月収は、不況を反映し前回調査に比べて学部生、修士課程、博士課程を問わずいずれも減少している。この理由として≪家庭からの仕送り≫が相当減少していることが挙げられる。特に学部生の場合、≪家庭からの仕送り≫は前回の8.7万円から今回は6.6万円へと大きく減少している。その分、学部生では≪奨学金、研究奨励金≫からの収入が1.3万円から2.7万円へと増加している。また、≪家庭からの仕送りのみで勉学可能≫と答えた割合は34%と前回より6%ほど減少している。さらに、≪アルバイトを増やしたい≫63%(前回56%)、≪家庭からの仕送りを減らしたい≫70%(前回74%)と回答しており、生活に必要な収入を家庭に頼らず自分で確保しようとする傾向が窺える。



食費、部屋代を節約し、書籍費、教養・娯楽費を確保へ

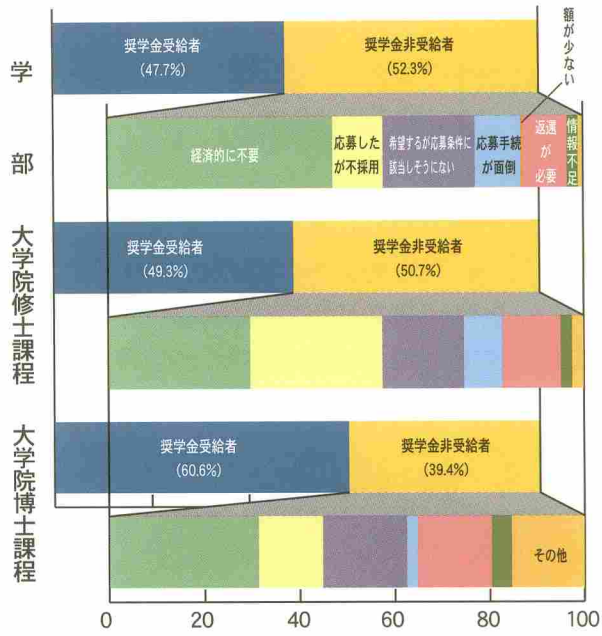


毎月の生活に必要な基礎支出（食費・部屋代・水道光熱費）は、支出全体の56%を占めているが、前回調査と大きな変化はなかった。また、≪剰余金・預貯金≫は平均で1.5万円と若干増加していた(前回1.3万円)。支出のうちで減らしたい項目では≪食費≫が36%(前回31%)と最も高く、次いで≪部屋代≫17%(前回20%)を挙げており、増やしたい項目では≪書籍費≫30%(前回32%)、≪教養・娯楽費≫12%(前回10%)が挙げられていた。このように、収入減への対応として基礎支出を節約しながら、書籍費や教養・娯楽費を確保しようとする傾向が窺えた。

E. 奨学金・授業料免除

京大生のほぼ半数は奨学金を受給、授業料免除者が減少

奨学生の割合は京大生全体では51％とほぼ前回と同じであるが、学部生では前回の24％から48％へと大きく増加した。また、≪利子なし奨学金≫の受給者の割合が75％から62％へと減少し、その分、≪利子つき奨学金≫の受給者が増加した。授業料免除については、全額免除者の割合が前回調査の13％から９％へと減少し、特に大学院学生の場合減少の割合が大きかった。また、出願したが不採用になった者も前回の６％から14％へと増加した。

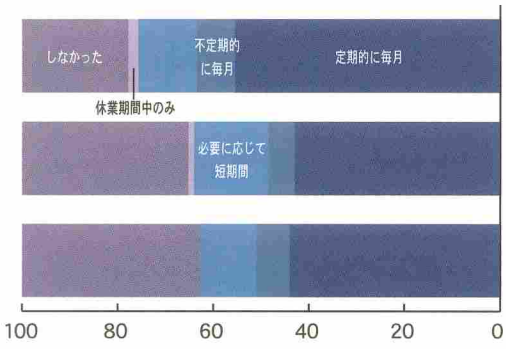


奨学金の受給状況（%）

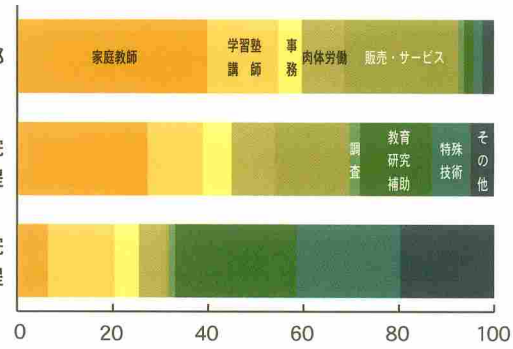
F. アルバイト

京大生の半数以上が毎月アルバイトをしている

アルバイトを《定期的に毎月した》者の割合は48％であり、前回調査とほぼ同様の傾向を示していた。アルバイトの職種では学部生、大学院生とも《家庭教師》《学習塾講師》の割合が高かった。また、大学院生では《教育研究補助(TA)》および《特殊技術》の割合がいずれも前回調査より増加した。アルバイトの月平均就労時間はほぼ半数の者が20時間未満であった。アルバイトの紹介先では、《友人・知人・先輩》が40％程度であったが、大学院生については、今回調査から新たに加えた《教官》が紹介者となった割合が修士課程で16％、博士課程で39％あり、《教育研究補助(TA)》および《特殊技術》については教官が紹介者となっていることが窺える。
アルバイト収入の使途に関しては、《衣食住の費用》に60％程度、次いで《教養・娯楽費》に20％程度を充てている。この傾向は前回とほぼ同様であった。また、アルバイト経験に関しては60％程度が《人生(社会)経験が得られ有意義であった》と回答している。



アルバイト状況（%）

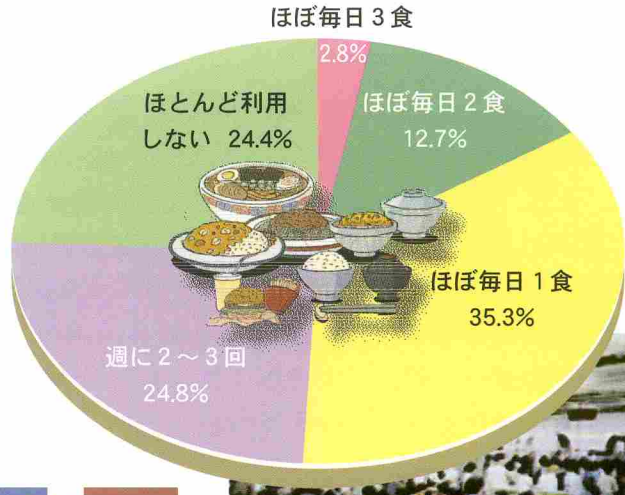


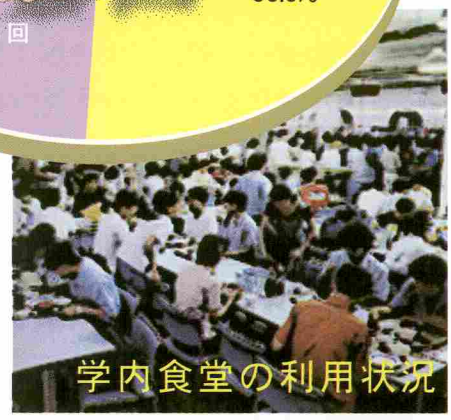
アルバイトの種類（%）

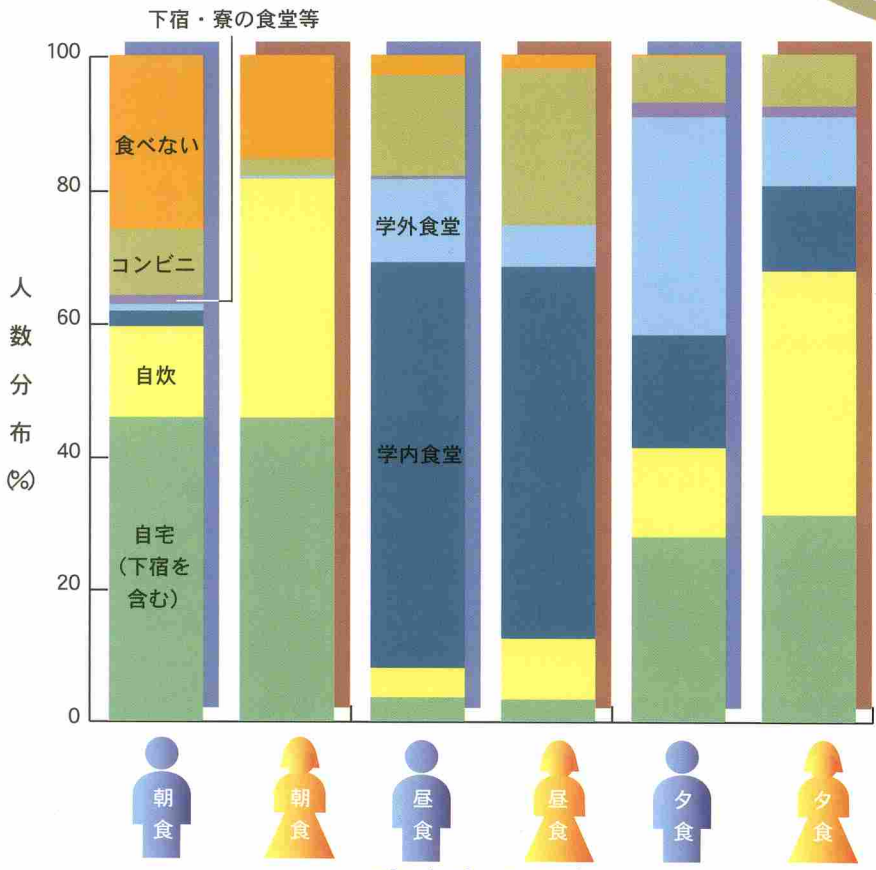
G. 食事

4人に1人は朝食抜き、昼食は学内食堂利用者が60%

朝食を摂らない学生の割合は24%と前回調査より若干増加した。また、昼食については学部生の約7割、大学院生の5割以上が学内の食堂を利用しており、≪学外食堂≫の利用者の低下および≪コンビニ≫利用者の増加傾向が窺える。夕食については≪自宅≫および≪自炊≫が学部生で62%、博士課程学生で45%に対し、修士課程学生では34%と低く、その分、修士課程学生は≪学内食堂≫と≪学外食堂≫の利用割合が高かった。学内食堂をほとんど利用しないと回答した者は大学院生では修士課程学生で26%、博士課程学生で33%であり学部生の18%に比べ割合が高かった。




学内食堂の利用状況



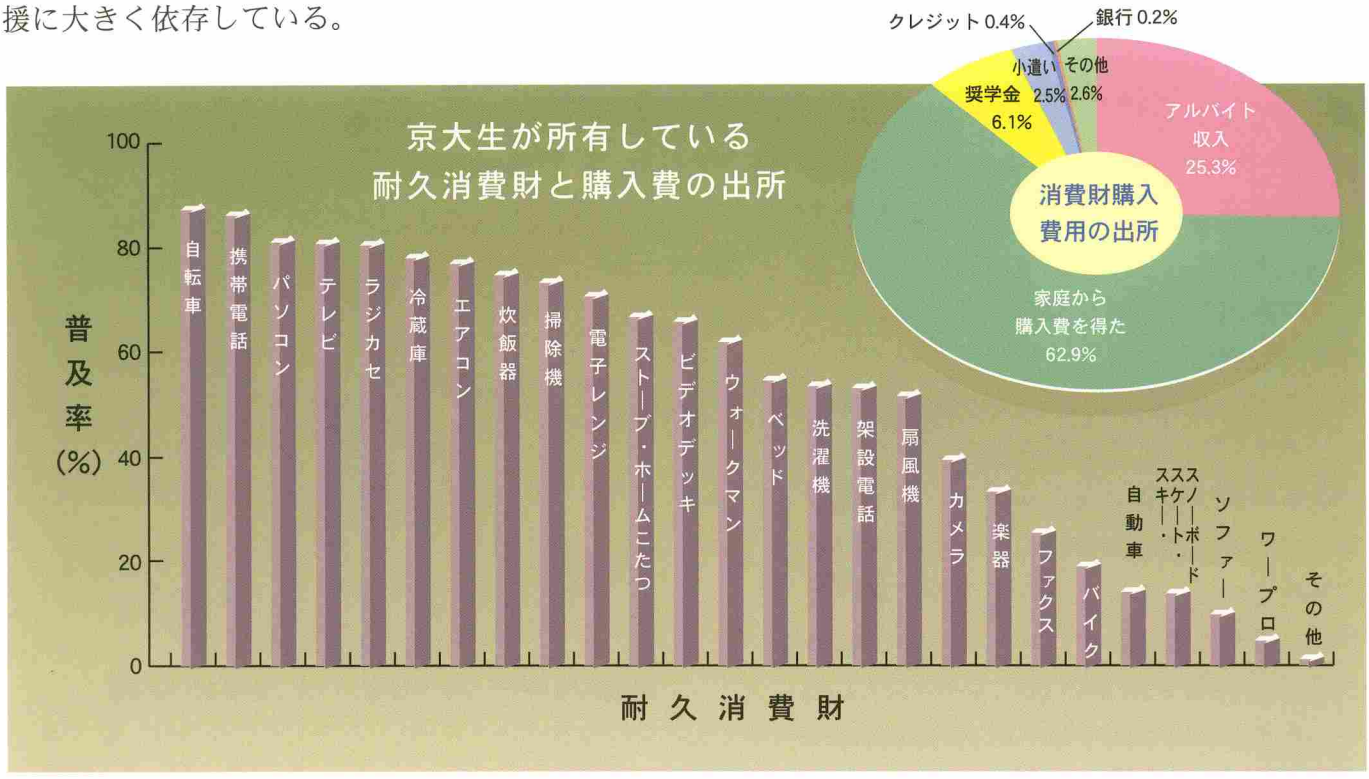
京大生の三食

H. 耐久消費財

携帯電話の所持者が全体で87%、学部生では94%

世相を反映して携帯電話の所持者が、前回調査の60%から87%へと大きく増加した。特に学部生では94%であり、ほとんどの者が携帯電話を所持している。その他≪パソコン≫が82%(前回70%)、≪自転車≫が88%(前回86%)であり、これらの耐久消費財は京大生の必需品となりつつある。また、≪テレビ≫(82%)、≪冷蔵庫≫(79%)、≪エアコン≫(78%)、≪ラジカセ≫(81%)などの所有割合がほぼ8割となっており、家電製品に囲まれた快適な一人暮らしを行っている様子が窺える。これらの耐久消費

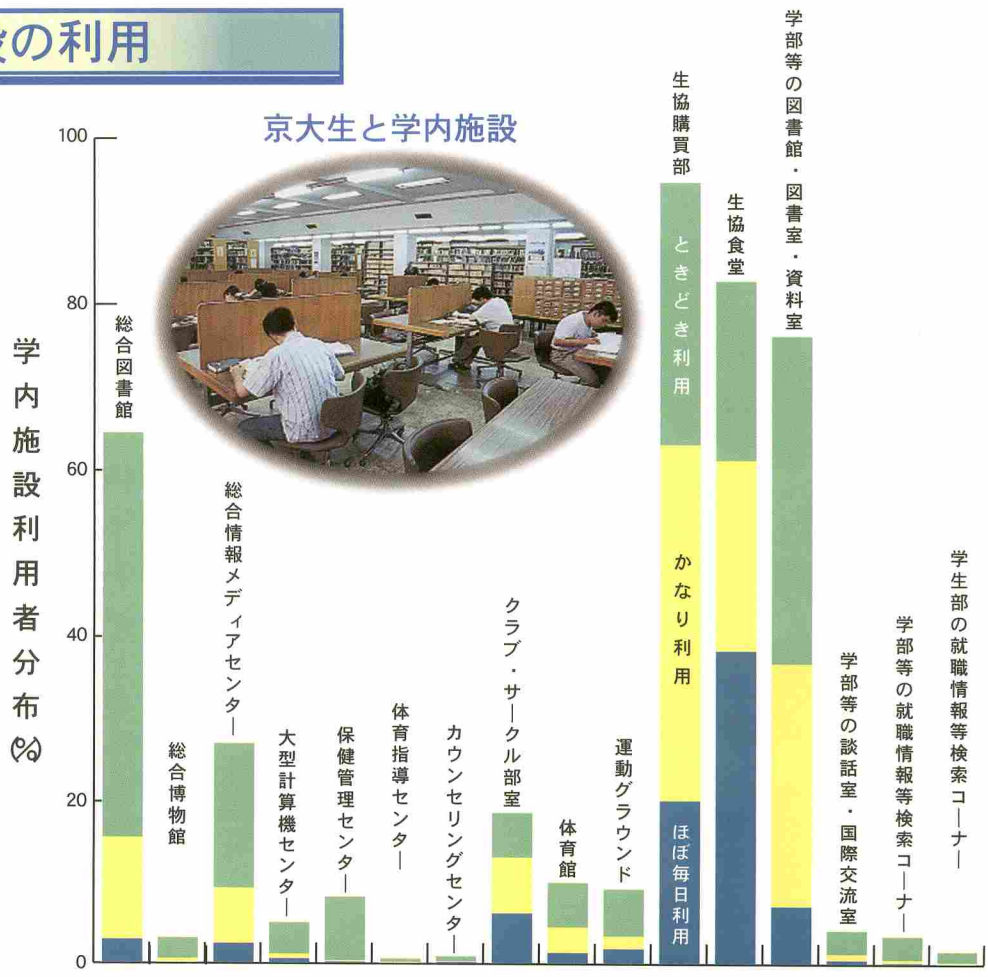
財の購入費用の出所は≪家庭から≫が全体で63％、学部生では73％となっており、≪家庭≫からの支援に大きく依存している。



I. 学内施設の利用

利用頻度が高い生協と図書施設

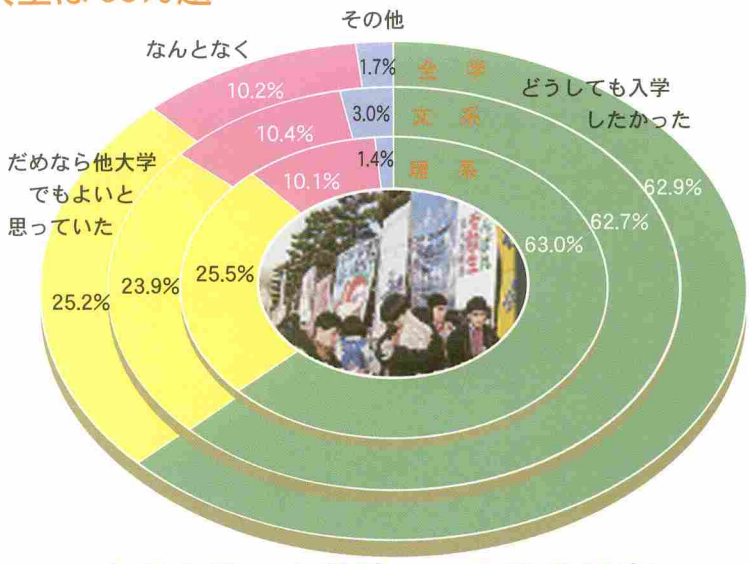
京大生が≪ほとんど毎日利用する≫、≪かなり利用する≫、≪ときどき利用する≫と回答した学内施設では、学部生、大学院生を問わず≪生協購買部≫が95％、≪生協食堂≫が83％と高く、キャンパスライフにおいて生協が大きな役割を果たしていることが窺える。また、≪附属図書館≫64％、≪学部等の図書館≫75％と、図書館の利用頻度が高いことも特徴として挙げられる。一方、≪カウンセリングセンター≫、≪体育指導センター≫は1％未満、≪学部等の就職情報検索コーナー≫、≪総合博物館≫、≪大型計算機センター≫、≪学部等の懇話室・国際交流室≫、≪学生部の就職情報検索コーナー≫は5％未満の利用にとどまっており、これら施設の利用促進に向けた検討が必要である。



J. 入学と学業

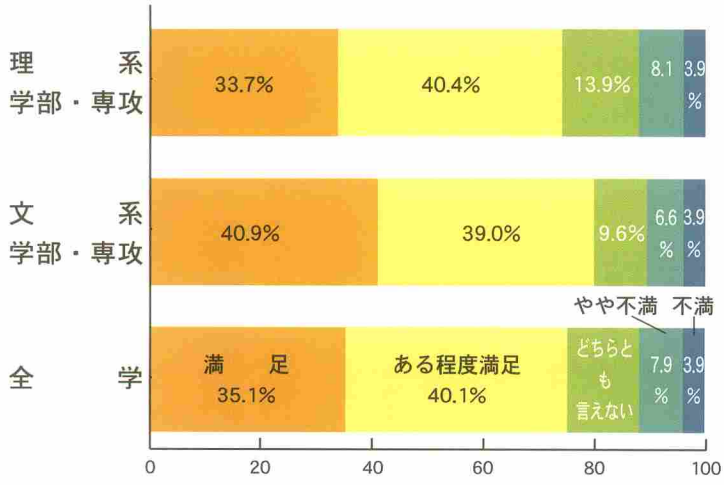
「どうしても入学したかった」京大生は60%超

≪どうしても入学したかった≫と回答した京大生は学部生で60%、修士課程学生で61%、博士課程学生で72%であった。入学の主な動機としては、≪京都大学の伝統や雰囲気に憧れていた≫を第1位に挙げたものが全体のほぼ4人に1人の割合であった。学部生では≪社会的評価が高い≫を挙げたものが2番目に多かったが、修士課程学生では≪就職する前にもっと深い専門知識を身につけたかった≫を第1位に挙げており、博士課程学生では≪スタッフ・設備が優れている≫が第1位に挙げられており、学部生と大学院学生では入学動機に差が認められた。学部・学科・専攻等を選択するのに重視した判断基準を問う設問に対しては、≪自分が惹きつけられた学問分野である≫と回答した者が学部生、大学院生とも約70%であった。一方、≪国際交流が活発である≫と回答した者は第1位、第2位をあわせても高々1%程度にとどまっていた。さらに、≪学部・学科・専攻等の教官に魅力を感じる≫を第1位に挙げた者は全体で3%であったが、第2位に挙げたものは大学院学生で約18%、学部生で5%であった。また、≪最先端の学問が学べる≫を第2位に挙げたものが学部生、大学院生とも20%おり、学部・学科・専攻等の選択の動機として当該学問領域への関心が高いことが窺える。



京都大学・大学院への入学希望度

在籍中の学部・学科・専攻に満足している京大生は70%を超える

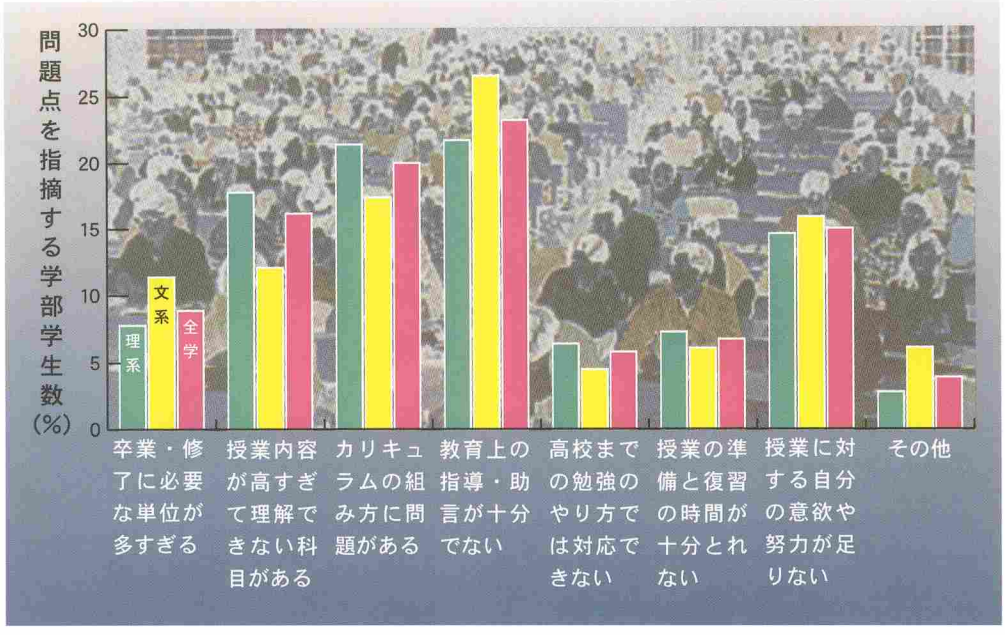


学部・学科・大学院専攻に対する満足度（%）

在籍中の学部・学科・専攻に対する満足度は前回調査とほぼ同様の傾向にあり、≪満足している≫、≪ある程度満足している≫をあわせた割合は京大生全体で75%であった。一方で、≪やや不満である≫または≪不満である≫と回答した者が依然11%おり、学部生が大学院生に比べ若干その割合が高かった。また、≪入学するときに将来の進路を決めていましたか≫という設問に対しては、≪決めていた≫または≪ある程度決めていた≫と回答した者が京大生全体では約70%であった。大学院博士課程の学生に限るとこの割合は約80%になっていた。

現行のカリキュラムに不満を抱く学部生の割合は前回調査より減少

学部学生のみを対象とした現行のカリキュラムに対する満足度の調査結果では、≪満足している≫または≪ある程度満足している≫と回答した者が41％となり、前回調査での35％に比べ増加した。一方、≪やや不満である≫または≪不満である≫と回答した者は前回調査の38％から29％へと減少した。また、≪現行のカリキュラムが消化できるか≫という設問に対しては≪できる≫と回答した者が34％、≪ある程度できる≫と回答した者が38％であり、前回の調査に比べ割合が増加している。現行のカリキュラムについて改善すべき点を３つ上げてもらったところ、≪カリキュラムの組み方に問題がある≫あるいは≪教育上の指導・助言が十分でない≫を第１位に挙げた者がそれぞれ20％程度おり、前回の調査結果とほとんど割合が変化していない。ただし、この調査を行った平成13年度の時点では、セメスタ制度が実施されておらず同制度の導入に伴う、学部生の反応については今後の調査が待たれる。

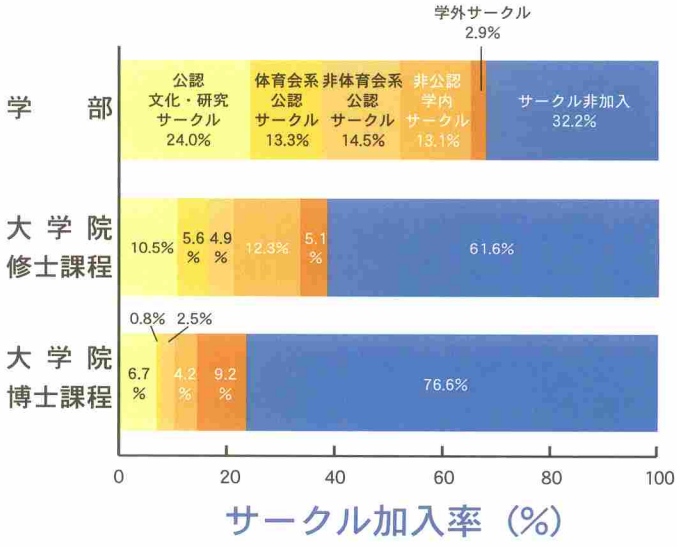


現行の学部カリキュラムの問題点

K. サークル・ボランティア活動

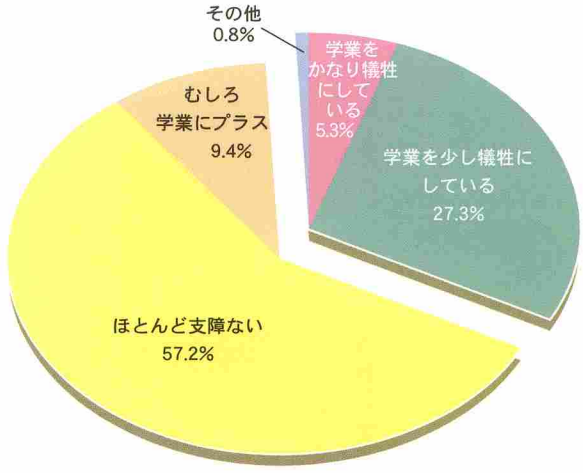
学部生の約70％はサークル活動に参加

学部生の約70％は、学内または学外のサークルに加入しており、その60％は１週間あたり５時間未満の活動に参加している。サークルの種別では≪スポーツ≫が53％であり、≪芸術・芸能≫19％、≪趣味≫13％の順に多かった。サークル加入の理由として主なもの２つを挙げる設問に対しては第１位に≪活動内容が好きだから≫を挙げた者が55％とほぼ半数を占めたが、≪友人を得るため≫と答えた者が第１位と第２位を合わせると44％になった。



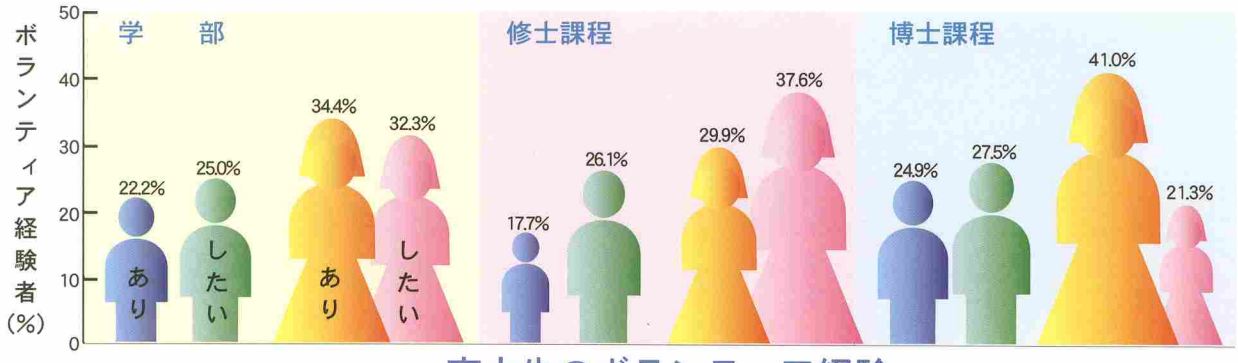
サークル活動は学業の妨げにならないと感じている

サークル活動と学業の関係では、≪ほとんど支障はない≫または≪むしろ学業にプラスになっている≫と回答した者が全体の67％であり、≪学業をかなり犠牲にしている≫と回答した学部生の割合は７％と前回調査(10％)に比べ減少していた。一方、サークルに加入しない主な理由を２つ挙げてもらったところ、第１位に≪時間に拘束されたくない≫あるいは≪時間がない≫を挙げた者が41％となった。また、≪学業の妨げになる≫と回答した者も学部生で約10％、大学院学生で約20％いた。この傾向は、前回調査の結果とほぼ同様のものであった。



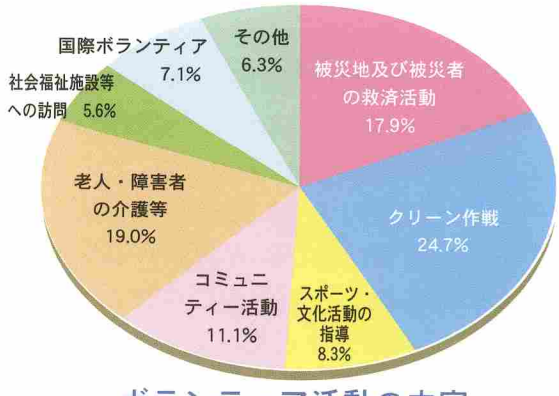
サークル活動と学業の関係

ボランティア活動を京大生の４人に１人が経験



京大生のボランティア経験

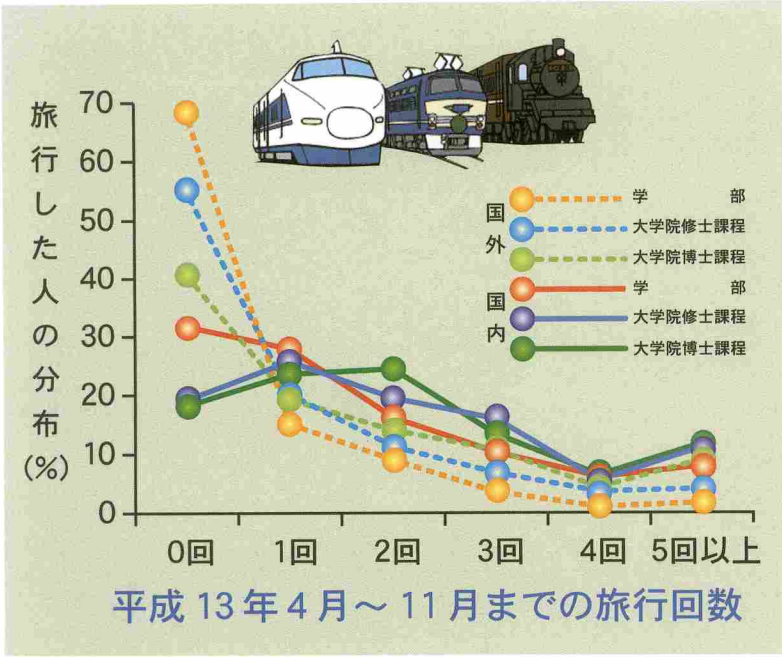
京大生の４人に１人がこれまでにボランティア活動を経験している。活動の内容としては学部生では≪クリーン作戦≫(35％)の体験者が多く、次いで≪老人・障害者の付添人(介助を含む)等≫(16％)となっていた。一方、大学院生では≪被災地域及び被災者の救済活動≫(25％)、≪老人・障害者の付添人(介助を含む)等≫(20％)、≪コミュニティ活動≫(15％)などが中心であり、学部生と大学院生では経験したボランティア活動の内容に相違が認められた。ボランティア活動に従事した１週間あたりの平均時間数では≪５時間未満≫が全体の75％を占めたが、≪30時間以上≫従事した者も６％程度いた。また、ボランティア体験の感想としては≪人生(社会)経験が得られ有意義であった≫あるいは≪自分の勉強に役立った≫と回答した者が全体の80％を占めていた。



ボランティア活動の内容

L. 旅行

大学院学生の旅行目的は国内外の学会参加が主流

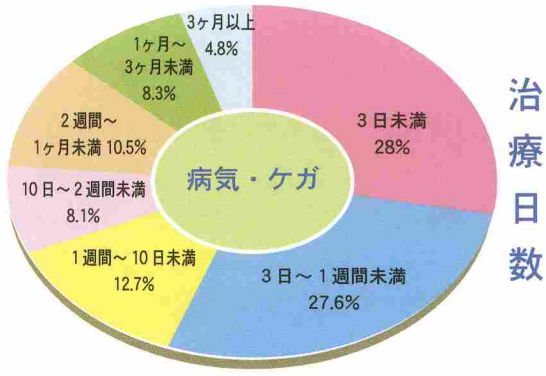


平成13年4月～11月までの旅行回数

学部生、大学院生とも4人中3人は1泊以上の国内旅行をしており、大学院生ほど旅行回数が多い傾向にあった。また、海外旅行についても京大生の半数が行っている。学部生の場合は、ほとんどが≪観光≫あるいは≪課外活動≫のための国内旅行であるが、大学院生、特に博士課程学生の場合はほぼ半数が≪学会参加≫を旅行の第1目的として挙げている。また、海外旅行に関しては、学部生、修士課程学生の大半は≪観光≫を第1目的としており、学部生では10％程度が≪語学研修≫あるいは≪留学≫を第1目的として挙げている。博士課程学生では≪学術調査≫あるいは≪学会参加≫を第1目的としたものが40％おり、≪観光≫の50％に近い割合を占めていた。

M. 健康・悩み

京大生の非喫煙者の割合は80％



京大生の約半数が、病気やケガをしたが治療に≪学内医療機関≫を利用したものは10％未満であり、≪学外医療機関≫を利用したものがほぼ半数、≪休養のみ≫あるいは≪市販薬≫ですませた者が40％であった。また、病気やケガの原因としては≪不摂生≫(40％)が最も多く、以下≪心労(精神的疲労)≫、≪事故≫、≪スポーツ≫の順であった。この中で、大学院生、特に修士課程学生の4人に1人が傷病の理由として≪心労(精神的疲労）≫を挙げているのは気になる点である。

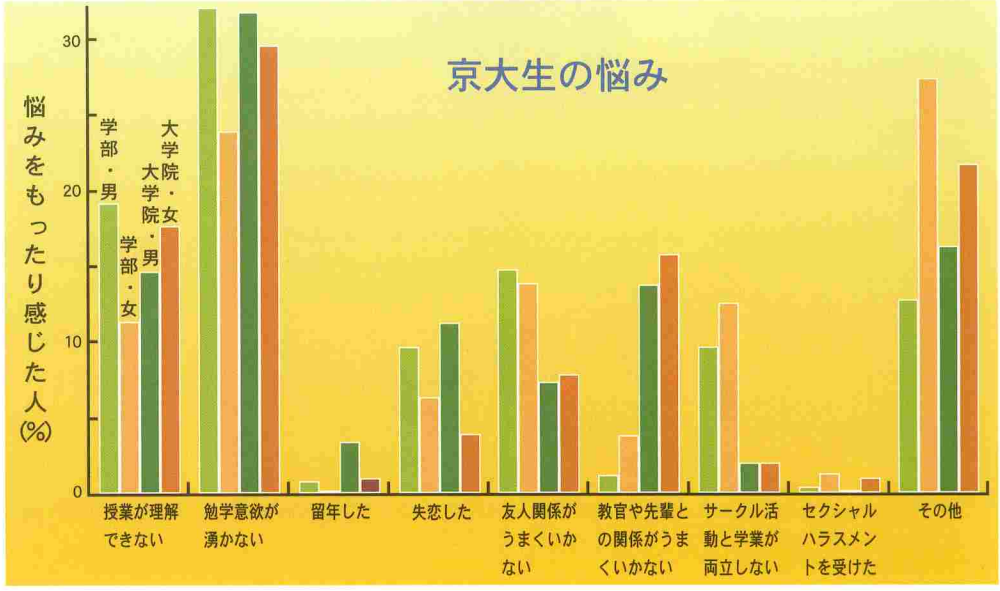
喫煙に関しては、≪喫煙の習慣がある≫、≪ときどき喫煙する≫あるいは≪喫煙するが、できれば止めたい≫と回答した者は京大生の5人に1人であった。さらに、学内に禁煙場所と喫煙場所を設定することについての設問に対しては≪全面的に禁煙にすべきである≫と回答した者が30％、≪禁煙場所と喫煙場所を分けることに賛成≫の者が65％おり、健康に有害なタバコを避けようとする姿勢が窺える。

≪京都大学学生健康保険組合≫への加入者は70％、≪学生教育研究災害傷害保険≫への加入者は50％であったが、これらの制度を知らないと答えた者が10％程度いた。また、≪学生総合共済(生協)≫へもほぼ半数の学生が加入している。

喫煙者分布

悩み事の相談相手は友人・先輩

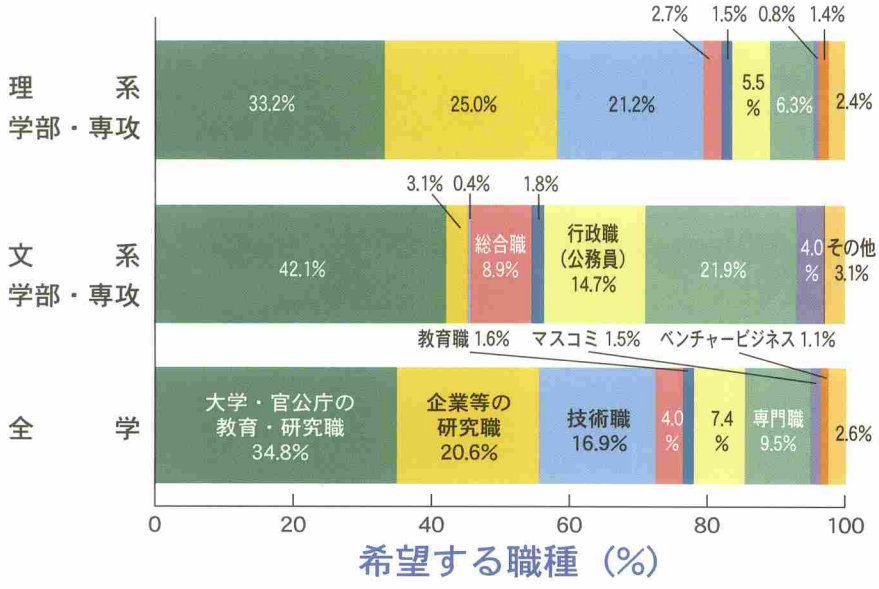
学部生のうち、入学後に何らかの悩みを抱いたことが≪ある≫者が63%、悩みを≪感じたことがある≫者が17%いて、これらを合わせると80%になる。大学院生でも学部生よりは若干割合が低いものの、相当数の者が何らかの悩みを抱いた経験をもっている。悩みの中で最も多い回答は≪勉学意欲がわかない≫(30%)であり、学部生では≪授業が理解できない≫(17%)、≪友人関係がうまくいかない≫(15%)ことに悩んでおり、大学院生になると≪研究室の教官や先輩との関係がうまくいかない≫(15%)悩みが加わっている。一方、悩みの相談相手としては≪大学内の友人・先輩≫(50%)、≪大学外の友人・先輩≫(25%)を挙げるものが多く、学部生では≪大学の教官≫、≪カウンセリングセンター≫、≪医師・カウンセラー≫を相談相手に上げたものは実数で数人しかいなかった。学内にはカウンセリングセンターを中心とした相談窓口が整備されているので、是非ともこれらの施設を利用して欲しいものである。



N. 進路（進学・就職）

学部生の60%、修士課程学生の30%が進学希望

学部生の60%は大学院修士課程への入学を希望しており、修士課程学生の30%も博士課程への進学を希望している。また、博士課程の学生の18%は外国の大学・大学院への留学を希望している。学部生の就職希望職種として≪大学・官公庁の教育・研究職≫、≪企業等の研究職≫、≪技術職≫を挙げた者がそれぞれ20%程度であった。一方、≪ベンチャービジネス(起業家)≫を希望するものは学部生、大学院生を問わず実数で数名程度しかいなかった。就職にあたっては≪自分の特技・能力や専門知識が活かせる≫ことを重視する者がほぼ半数であり、≪華やかで世間からもてはやされる≫ことを重視する者は数名しかいなかった。他方、「もし理想の仕事や職場を選ぶとすれば、どのようなことを重視するか」という設問に対してはほぼ半数の者が≪やりがい≫を挙げており、次いで≪能力を発揮できる≫を挙げた割合が20%程度であった。就職する地域については、ほぼ半数の者が≪地域を問わない≫と回答しており、≪京阪神地区≫と回答した者が40%、≪京浜地区≫と答えたものは7%であった。



京都大学学生生活白書

平成13年度《学生生活実態調査》のまとめ－概要－

平成15年3月　発行

編集　平成13年度《学生生活実態調査》ワーキンググループ
委員長　守屋和幸（情報学研究科教授）
委　員　上田哲生（総合人間学部教授）
服部良久（文学研究科教授）
田中秀夫（経済学研究科教授）
北村隆行（工学研究科教授）
根岸　学（生命科学研究科教授）

発行　京都大学学生部
〒606-8501　京都市左京区吉田本町

KYOTO UNIVERSITY
KYOTO JAPAN
FOUNDED 1897